

足羽山の自然保護

林 武 雄

さる5月4日、福井市立郷土博物館の講堂で「足羽山の自然を守る会」の初会合が開かれた。「足羽山も自然を守る会ができたとは悲しいことだ」と、かつて福井市を訪ずれ、足羽山の美しさを賞賛した、詩人であり野鳥研究家でもある中西悟堂氏を嘆かせたが、都市周辺における自然破壊は近年目にあまるものがあるといえよう。観光だ、やれ道路だ、宅地造成だといって、緑地や原野、山林が簡単に取り除かれている現状を見ると、将来都市周辺の自然はいったいどうなるのかと心配になってくるのである。

足羽山の姿も年々昔の足羽山でなくなりつつある。特に昔の足羽山を知る人々にとってさいきんの変りようは驚くばかりである。福井市民が誇りとしている緑の豊かな足羽山が自動車の騒音や排気ガスに満ち、おちおち散歩もできなくなりつつある。そして自動車の騒音は深夜にも及び一部不夜域と化した公園は、もはや野鳥の安住地ではなくなっているのである。競輪の花火が山頂でさく裂したり、建造物の新築や看板が自然との調和を損ねつつあることも見のがせない。赤茶けた山肌を露出した見にくさも何とかならないかという声も多い。競輪の花火が野鳥の生息上悪影響があり、これを中止してほしいという申し入れが続いて、ことしの春ようやく、山頂での打ち上げが中止されたが、自然公園として他に例を見ないほどの足羽山で花火が上げられている当局の無神経さにあきれた人が多かっただけにやれやれという気がする。

自然を守る会が結成された動機は、こうした無秩序、無計画ともいえる自然破壊を黙視できないやむにやまれぬ気持ち盛り上ったもので、日本野鳥の会福井支部が中心となって発足への働きかけをしたものである。

市当局の計画によれば、足羽山、八幡山、兎越山のいわゆる足羽三山は、いろいろな観光施設が5ヶ年計画で進められるといわれる。

観光開発も結構であるが、わずか100mの山の上にロープウエーをつけたり、遊園地化して建造物をやたらに造ることは困りもので、足羽山の価値を台無しにしてしまう心配が多い。

東尋坊がよい例であり、各地で都市周辺地の自然の山々がけばけばしく遊園地化されていることを思うと、せめて足羽山だけはあまり人工的な手を加えないで、自然林を残し、静かに散歩や読書ができ、動植物が観察できる情操的、科学的利用を青少年や市民に奨励できる環境の整備を願いたいものである。

初会合に参加した人々は数10年も足羽山に住んでいる人たちや、毎日足羽山を1回は訪ずれ

るという早起き会の人々、その他あらゆる階層の人々であったが、いずれも足羽山に強い愛着をもつ熱心な保護賛成者ばかりであった。当日は特に足羽山の現状について各分野について報告されたが、あまり人々に知られていない貴重な古墳郡などの文化財の多いことや、動植物について紹介され足羽山の価値をあらためて知ったわけであるが、こうしたことをもっとPRすることによって市民の関心を高め、協力を得る必要がある。

私の調べた足羽山周辺の野鳥だけでも100種類をこえるが、特に春秋の渡り鳥の多いことは市街地に近いだけに非常に貴重な場所といえる。野鳥の会では、愛鳥週間に毎年探鳥会を開くならわしであるが、その観察記録をみると、いつの間にか少なくなったり見られなくなった鳥がたくさんいる。例えば、青葉のこずえに鈴の音をふるわせて鳴くようなサンショウクイや、大空に孤を描いて飛ぶタカの仲間のサンバ。また、フクロウやアオバズク、夜行性のヨタカなども珍らしいものになり、記録できない年もある。また普通に見られるホオジロやシジユウカラ、エナガイカルなどの個体数も目立って減少してきた。このため野鳥の会では恒例の探鳥会の場所を他に移してはどうかという意見がでている。初めて参加する市民の人々に野鳥の美しい声や姿をたのうしていただき、野鳥に親しむことのたのしさを知ってもらう行事であるが、以前にくらべると参加者のどれだけが満足してもらえたかが心配で、せっかくの美声も乗り入れてきた自動車の音にかき消されてしまうこともしばしばである。

早起き会の人々も、探鳥会の参加者も足羽山に自動車の乗り入れは何とか止めてもらいたいという意見が多く出されているのである。

現代人にとって、自然との交流は欠かせないものであるが、美しい自然がひとたび失われたらふたたびその姿は容易に取り戻すことのできないことを知るべきであろう。

野鳥も鳴かず、虫も飛ばず、花も咲かない山、そういう公園にはしたくないのは私1人であろうか。さいきんは都会地のビルの屋上にも木を植えて自然をとり戻そうという努力がされる時代である。福井市の象徴ともいえるべき足羽山の静けさを1日も早く取り戻し、そこに昔ながらの動物を住まわせてやりたい。そして祖先の築いた数々の遺跡も後世に伝えたいと思う。

伝統的な足羽山の探鳥会も、鳥を知る人たちから見放されてしまうことのないように、この山の価値ある利用をみんなで真剣に考えるべきではないだろうか。